

【壊疽性乳房炎とは】

はじめに、壊疽(エソ)性乳房炎という言葉聞いたことがあるでしょうか? 壊疽性乳房炎は罹患分房が紫色や赤黒くなり、非常に致死率の高い乳房炎です。激的な症状を示す甚急性の経過をとり、その多くは全身症状と乳房の症状を伴い2~3日で症状が悪化し、急死してしまいます。

ちなみに、乳房炎でたびたび耳にする甚急性とは乳房の症状だけではなく、発熱や食欲不振などを伴った乳房炎のことを言い、獣医師による診療が必要になります。

分娩後1~2週間以内の牛や高泌乳牛に多くみられます。罹患分房は腫脹、硬結、熱感、疼痛を示し、変色する場合があります。



【原因】

原因菌の多くは大腸菌などのグラム陰性細菌や黄色ブドウ球菌(SA)によると報告されています。つまり、壊疽性乳房炎とはある特定の細菌が引き起こすのではなく、甚急性の乳房炎が結果として壊疽性まで経過が進んでしまったものをいうようです。SAが乳腺組織に細胞の塊をつくり、それが壊疽の発端となっていると示唆している論文もあります。とはいえ、壊疽性まで波及してしまう例はごくまれで、そのきっかけや発生機序はよくわかっていないのが現状です。

【症状】

最初にも書きましたが、基本的な症状は甚急性の乳房炎と同様です。乳房局所症状だけではなく全身症状を伴い、その多くは起立不能となります。罹患分房はグラム陰性細菌等に産生された内毒素(エンドキシン)により、顕著な腫脹、熱感もしくは冷感を呈します。また乳房の色は紫~赤黒く嫌な色に変色してしまう場合が多いです。原因菌によっては罹患分房周辺部が浮腫や気腫となり、プチプチという捻髪音とともに、ガスを含んだ乳汁が排出される例もあります。



【処置】

甚急性を呈するような牛の処置ですが、獣医師が来るまでに頻回搾乳を行い、できる限り細菌に侵された乳を排出してください。乳が出にくい場合はオキシトシンなどを用いてしっかりと搾り出しましょう。また冷水などで分房を冷やすことも効果があります。大腸菌などのグラム陰性細菌による乳房炎が疑われる場合には、セファメジンなどの殺菌系軟膏は症状を悪化させてしまう場合があります。乳を搾りきった後にはまず初診時にはオキシテトラサイクリン(OTC)などの静菌的な軟膏が無難でしょう。繰り返しになりますが、軟膏を入れることよりも、乳をできる限り排出する、乳房を冷やすということが重要です。

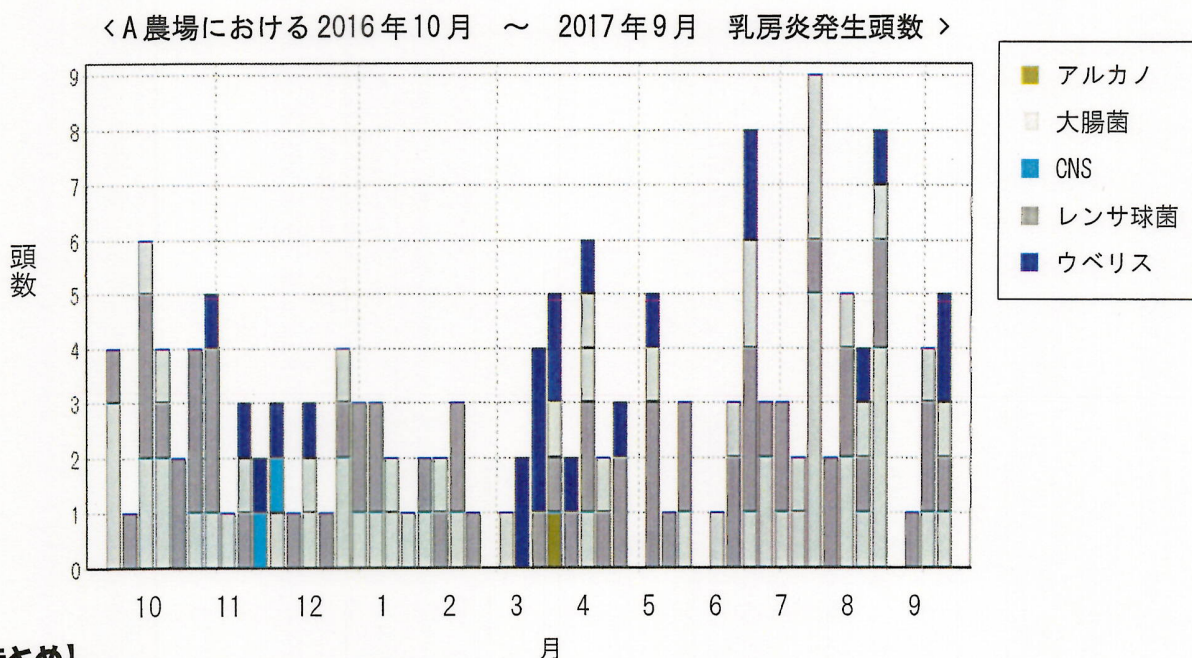
【乳房炎の記録をつける】

いま農場でどの程度乳房炎が発生しているのか、その症状はどのようなものかなど、乳房炎の記録を

取ることは対策を考える上で非常に重要な情報となります。繁殖検診前に授精報告書をファックスされていると思いますが、乳房炎の牛も一緒に報告しましょう。そうすることで、乳房炎発生の状況を詳しく分析することが出来ます。また、乳房炎のスコアをつけることで、こういう時には A の対処、こんな時は B の対処という風に牛の状態によって、冷静に、コンスタントな対応を取ることが可能です。まれに、軟膏治療だけでは治りにくく、抗生剤の注射と軟膏を併用して 1 週間程度治療し続けなければ治りにくいとされている乳房炎原因菌もあります。そうしたタイプの乳房炎の牛は一度乳汁を調べてみる必要があるでしょう。

スコア	症状	対応（例）
1	PL の異常/ブツ(乳質の異常)	様子見？軟膏？
2	1 の症状+しこりや腫れ(乳房の異常)	軟膏？注射？
3	2 の症状+発熱や食欲不振など(全身の異常)	軟膏&注射？往診？

記録をとることで、何度も乳房炎を繰り返す牛を摘発することが出来るかもしれません。またきちんと報告することで下の図のように年間の乳房炎発生の推移をみることも簡単にできます。



【まとめ】

壊疽性乳房炎はまれな症例です。激変をともなうので、あまり見たことのない農家さんにとってはショッキングな光景です。詳しい発生機序がわかっていないですが、甚急性の乳房炎をいかに早く、そして適切に処置するかがカギとなります。そのためには乳房炎発見のセンサーを十分に発揮させなければなりません。記録があれば、「最近変な乳房炎が多いな…」「去年に比べて乳房炎が多い気がする…」そんな風に感じている農家さんに対して、しっかりとデータとしてわかりやすくお見せすることができます。乳房炎のスコアリングなどまずは発生した乳房炎を簡易的にでも記録するようにしましょう。毎回の搾乳で記録を取るの簡単な作業ではありませんが、農場の乳房炎の傾向を知ることは今後役に立ってくるはず！普段見ないような乳房炎に対しても、冷静に対応できることでしょう。